

▶大杉栄と中国のエスペランティストたち

1885年に生まれた大杉栄は、前回に紹介した第六高等学校の英語教師であるガントレットが始めた通信教育を受けた700人近い生徒の中の一人でした。1906年3月、東京の電車賃値上げ反対運動に参加して逮捕された大杉は、「一犯一語」というモットーの下、収容された監獄でエスペラントに励み、かなりモノにしたようです。

40数年来の畏友、エスペランティストの手塚登士雄氏の論考「日本の初期エスペラント運動と大杉栄らの活動」(アナーキズム運動研究誌『トスキナア』4号5号、皓星社刊)によれば、「今朝早くからエスペラントで夢中」「エスペラントは面白い様に進んで行く。今はハムレットの初幕の処を読んで居る」という大杉の手紙を紹介しています。そして三か月後に出獄した大杉は、創立間もない日本エスペラント協会の活動に参加し、協会付属エスペラント学校では運営と講師として大いに活躍しました。

手塚氏は、「『日華世界語教科書』が1907年5月に発行されているので、その頃すでに在日中国人留学生の間で学習意欲が高まっていたと想像できる」(「中国のアナキズム運動とエスペラント」(『トスキ

ナア』3号)と記しています。中国では今もエスペラントは世界語と称されています。

その頃から幸徳秋水などの日本の革命家らと張継、劉師培ら中国の革命家たちとの交流が始まり、大杉栄は日本にいる中国の革命家たちにエスペラントを教えました。その多くはアナーキストだったようです。本来持っている中国人の自由奔放な個人主義的資質は、几帳面すぎる日本人よりアナーキズムの思想にととても合う、と私は思っています。こんなことを言えば、中国の人たちに怒られるでしょうか。日本で生まれ育った私は、この中国人の資質を大いに推賞したいところです。また、エスペラントの理念である民族や言語を超えた世界性は、アナーキズムを信奉する人たちの考えに極めて近く、スムーズに受け入れられました。それ故に、中国のアナーキズム運動はエスペラント運動と連動するような形で進行していったようです。

このように中国にエスペラントが伝わった一つの流れが、在日中国人の革命家、とりわけアナーキストたちからでした。ちなみにもう一つの伝播の流れは、パリに留学していたアナーキスト、呉稚暉や李石曾らによるものです。

▶魯迅、周作人兄弟とエスペラント

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」IV
中国のエスペランティストたち

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おもしろいよしひろ)

『阿Q正伝』『狂人日記』を書いた中国の文豪・魯迅は、エスペラントに大変関心がありました。弟の周作人はエスペラティストとして自他ともに認められる存在で、北京世界語会の会長を1922年に就任しています。魯迅がエスペラントを話せたかどうかはわかりませんが、エスペラントの支持者であり、強いシンパシーを持っていたことは確かです。

バラライカを弾くロシアの盲目のエスペランティスト、ワシリー・エロシェンコが日本に滞在していましたが、危険思想の持ち主と見られ、日本から追放されて中国に渡った時、魯迅は彼と親しく交流しています。

エロシェンコは、蔡元培が北京大学学長に就任後の1921年、北京大学は必修科目にエスペラントを採用し、講師にエロシェンコを起用しましたが、その力になったのが魯迅でした。このエスペラントの授業に何百人か、多くの学生が関心を持って参加しましたが、エロシェンコの研究者で中国文学者の藤井省三氏によれば、革命成ったロシアに一時帰国したエロシェンコは、故郷のウクライナに戻り、農民の生活ぶりを見て〈ロシア革命〉に失望したようです。エロシェンコの実家の近所の人たちにはロシア革命はほとんど益がなく、みんな不満タラタラ。この“革命”は失敗だったとエロシェンコは思ったそうです。そして北京に戻ったエロシェンコは、故郷ウクライナでの話と自分の思いを率直に学生に語ったところ、

マルキシズムにシンパシーを感じていた北京大学の学生たちは、ロシア革命を貶すエロシェンコの授業に徐々に欠席し最後は、聴講者は一人しかいないという状況になったようです。ともあれ、魯迅と周作人はエスペラントと深い関係がありました。

➤ 巴金とエスペラント

落語の三題噺ではありませんが、中国・エスペラント・アナキズムという3つの題を出せば、まさに巴金です。四川省成都出身の巴金は、もし中国で最初にノーベル文学賞を取るとすれば彼しかいない、と言われるほどの作家でしたが2005年、100歳を超えて亡くなりました。長編小説『家』は、旧家の大家族制の抑圧に苦しみ、それに対して反抗をする青年を描いて多くの読者を得て、大きな反響を呼びました。

新中国成立後は、中国作家協会の主席を務め、1984年5月には国際ペン東京大会に参加するため来日、彼らの歓迎パーティーに私も出席、巴金と会い名刺を交換したことが甦ってきました。この時の模様は次回に。

(続く)